

中国における西洋宣教師の本色化宣教理論の実践¹

徐 亦 猛²

一、序

19世紀以来、世界は日に日に分散から統合に向けて進展してきた。西洋植民地主義の拡大とそれによる影響のもと、中国など遅れた非西洋国家は、相次いで世界体系に取り込まれた。この過程において、多くの非西洋国家は西洋国家の植民地ないし半植民地となった。それと同時に植民地ないし半植民地となった国々には、新しい外来の文化的影響のもとで、経済の変化が生じた。

中国における初期のキリスト教宣教活動は、ある程度の成果と評価を得たものの、その一方で大きな代価を伴った。特に中国近代以降、キリスト教は帝国主義の武器と共に中国に入り、さまざまな不平等条約によって中国で合法的地位を獲得した。このことが原因で、中国人は初めからキリスト教に対して反感を抱き、民衆の間ではキリスト教は「洋教」と呼ばれ、さまざまな面で民衆から抵抗があった。そのため、宣教は非常に厳しい状況に直面していた。このような問題を解消するためには、中国における西洋宣教団体の宣教戦略に根本的な変化が求められた。

しかし、中国は約56の民族からなる多民族国家であり、各民族の伝統文化、生活習慣、および言語の差異によって、中国全土で同じような宣教方法を展開することは極めて困難であった。そのため、各宣教団体は民族や地域ごとに、現地に適応できる新しい宣教理論を実践する必要があった。すなわち、本色化を目指した宣教方法の実践である。本論文では、漢民族地域および少数民族地域における宣教師の動向について考察する。

本論文では、まず本色化思想の生成および発展について、教会内外の歴史的背景を考察する。具体的には、世界的なキリスト教宣教大会の動向に注目し、「三自」理論の提起と発展について論じる。続いて、キリスト教海外宣教理論の発展の下、漢民族地域で活躍した宣教師たちがこの理論を一つの挑戦として受け止め、中国で三自の教会を建設するために行った努力を評価し、世界的視野のもとで中国国内の宣教師たちの動向を分析する。更に、少数民族地域において、特に英国循道公会および中国内地会に所属する宣教師たちが、

¹ 本研究はJSPS科研費（研究課題番号：JP20K01233）の助成を受けたものです。

² 福岡女学院大学大学人文科学研究科比較文化専攻

それぞれの宣教理論と思想に基づいて行った具体的な宣教活動について言及する。最後に、これらの議論を総括する。

二、世界のキリスト教宣教の動向

近代における欧米の海外宣教運動は地域に広く関わる世界的運動であり、アジアやアフリカなどキリスト教信仰の国々以外の地域はその宣教運動の対象である。宣教師たちが中国で遭遇した問題や困難は、他の地域においても同様であった。宣教運動の規模の拡大と共に、西洋の宣教協会の経済的負担も次第に大きくなり、そのことが、経済面において西洋の宣教協会に頼らないで教会が自養を促進する直接的な原因であった。宣教地における教会の自治 (self-governing)・自養 (self-supporting)・自伝 (self-extension) という理念を最初に提起したのは、アフリカへの宣教師として派遣された英国聖公会のヘンリ・ヴェン (亨利・樊 Henry Venn) であった。1841 年、宣教協会が大きな経済問題に直面した時、ヴェンは宣教地の教会における牧師の任用や宣教地の教会の自養の実現などの問題を提起した³。それ以後、彼はこの主張を展開し、自治、自養、自伝という「三自」の宣教理論を形成した。1860 年のリバプール宣教会議において、多くの参加者はヴェンの宣教理論「三自」に賛同したことからも、その当時、相当の影響力を及ぼした考えでもありと推測できる⁴。ヴェンと同時代の米国公理会 (ABCFM) の宣教機構責任者ルーファス・アンダーソン (安路福 Rufus Anderson) も、1841 年の米国公理会 (ABCFM) の年度報告において、宣教活動を通して宣教地の教会指導者を育てることに注目しなければならない、と類似した考え方を提案した。彼は宣教地における按手礼式に言及しつつ、「このようにして、福音はまもなく現地で土着化し、福音施設は神の恩寵を通して自立と自伝のエネルギーを獲得した」と叙述している⁵。1848 年の年次報告でも、米国公理会 (ABCFM) 幹事の署名入りで同じ関心が示され、宣教地の教会に関しては、「どこまでこの国の全ての団体の権限から独立すべきであるか、自養と自立に向けてどのように訓練されるべきか・・・宣教師が教えるべきことと宣教教会の性格に関して、米国公理会 (ABCFM) の責任は何か」という問いかけが行われている⁶。

ヘンリ・ヴェン と ルーファス・アンダーソンが提起した「三自」の宣教理論は、19 世紀後半のプロテスタント宣教運動の主流思想となっただけではなく、世界の各宣教地においても実践された。そして、1900 年にニューヨークで開かれた宣教会議において、本色教会の自養の問題は更に注目された。この会議の中、世界各地からの宣教師たちは「本

³ C. Peter Williams, *The Ideal of the Self-Governing Church*, Leiden: New York, 1990, pp.3-4.

⁴ Ibid., p.24.

⁵ Pierce Beaver, *To Advance the gospel-Selections from the Writings of Rufus Anderson*, Grand Rapids, William B. Eerdmans Publishing Company, 1967, p.103.

⁶ Ibid., p.122.

色教会の自養」を主題として取り上げ、積極的な討論を行った。米国メソジスト教会のジョージ・ウィントン(喬治・温頓 George B.Winton)は宣教についての原則をまとめ、「宣教資金は宣教師自身の宣教活動に限定して用い、宣教地の信徒に教会の財政を負担するように最初から教えて宣教地教会の自養を実現させる」⁷と述べている。ニューヨーク宣教会議の大きな成果として、全世界の宣教団体は宣教地の教会の自養の実現を宣教の基本原則として認識し、実行することに合意している。

1877年5月に上海において第一回プロテスタント宣教師全国大会が開かれ、その大会において特に注目されたのは宣教地教会の「自養」についての問題であった⁸。中国にいる宣教師たちは1860年のリバプール宣教会議の「三自理論」を踏まえて、教会「自養」の問題について熱心に討論した。アメリカのメソジスト教会の宣教師は「本色教会の自養」について講演し、その冒頭において、「本色教会を一刻も早く実現しなければならない。私たち宣教師の責任としては自分の権限の範囲内で実現させ、良い結果に達するために努力すべきである。このことについて宣教師はだれも反対すべきではない。教会の自養を実現することこそ、本当の本色教会と言える。外国の資金に頼るばかりの教会は現地の人々から疑いの目でみられる」と述べている⁹。更に、彼は宣教地の教会へ資金援助する従来の宣教協会の宣教方法を、「従来の宣教モデルの下にキリスト教はねじ曲げられたものとなり、発展が遅れるのである。このような訓練を受けた中国のキリスト者は最初から西洋の教会の資金の豊富であること、西洋の教会は中国教会を助けるために喜んで献金を捧げるという誤った理解をしている」と厳しく批判し、また「宣教師は宣教資金を使って宣教助手を雇うことを慎重にしなければならない。適切な宣教地の人を雇い、彼らの同胞に宣教する。一旦キリスト教へ入信し教会の会員になった時から、彼らへ自分の能力に応じて福音宣教へサポートする習慣を育てるべきである」と¹⁰訴えている。東洋固有の文明を発揚し、一刻も早くキリスト教から「洋教」という悪名を取り除くために、20世紀以後、中国教会を自立させることは、宣教師と中国人教会指導者との共同目標であった。

三、漢民族地域における宣教師たちの実践

宣教師たちの宣教師理論と思想は討論にのみ留まるのではなく、具体的な宣教活動において実践された。それによって、20世紀前半において、中国教会は大きく発展した。宣教師たちが論じた教会自立の問題の中で、最も重要な部分是中国教会各教派の連合である。本色化教会は自身の弱い立場を克服するために、西洋の宣教協会が中国に伝えた教派

⁷ Ibid., pp.289-324.

⁸ 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006年、26-27頁。

⁹ S.L.Baldwin, *Self-support of the Native Church, Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China*, Shanghai: Presbyterian Mission Press, 1877, pp.283-284

¹⁰ Ibid., pp.287-288.

的な背景の相違を破棄し、教派間の連合・合同と協力を目指した。そして医療・宗教教育などキリスト教宣教事業を通して、各教派は外国教派を背景とした相互の壁を壊し、教会の「洋教」という色彩を取り除いたのである。歴史的な原因から、1858年に中国と西洋列強との間で不平等宣教協議が結ばれて以降、中国へ伝来した西洋の宣教協会は130以上あり、各宣教協会は中国国内で独自の宣教機構や教会を設立し、教会の内部における教派間の対立や攻撃が非常に大きな問題となった。中華基督教協進会の指導者たちは、「中国へ伝来した各宣教協会の名称は異なるだけでなく、考え方も様々であったため、信仰の浅い信徒たちはそれを区別することができず、自分は英国の教会に属している、アメリカの教会に属していると口々に自称する傾向があった」¹¹、「同じ場所で様々な教派が宣教事業を行ったので、教派間の対立や摩擦がしばしば起った」¹²と述べた。更に、西洋から伝来した各教派の神学間での争いによって、「中国教会は絶えず新旧の争いに翻弄され、双方の衝突や対立は深刻化し、政治、国際、種族などの問題についての意見の相違が明らかになったことから、教会は大きな危機に直面することになった」¹³と認識した。中国における各教派の連合・合同は本色教会の建設にとって窮地に陥った。中華基督教協進会総幹事誠静怡は「現在の基督教会は有限の勢力で目の前の無限の時機に対応するためには、最も緊密な協力関係を持つ事が必要である」¹⁴とコメントした。

中華民国を成立以後、中国教会の連合・合同は下準備と実施の段階に入った。米国長老教会の宣教師ローベンシュティン(羅炳生 Edwin C. Lobenstine)はこのことについて、「教会連合・合同運動の展開において、第一に必要なのは、教会自身の発展である。第二には、各教派の教義の内容に共通する点があることを宣教師たちが自覚することである。各教派間は互いに対立し、独自宣教するのではなく、連合・合同し、協力し合うべきである。そうすれば、大きな宣教結果が得られる」¹⁵と述べた。

宣教師たちと中国教会の指導者は各教派の合同団結によって、緊迫した社会情勢に対応できると考えたのである。教派の連合・合同について、教会内部において繰り返し、熱心に討論した後、実行可能な四つの方式がまとめられた。先ず同じ教派のもとにある各教会を統一することである。例えば、バプテスト系の各教会を「中華浸礼会」、ルーテル系の各教会を「中華信義会」と統一する。このような合同・連合は内部的な整合であり、教義、組織、人員の配置、経済の調達など最小限度の調整によって可能となる。教会内部の人々は比較的このような調整を受け入れ易く、これは最も障害の少ない近道であり、将来の広い範囲における各教派連合・合同の最初の一步として認識された。第二に、同じ地域の各

¹¹ 誠静怡、「本色教会之商榷」、5頁

¹² 余日章「将来西教会对于中国教会合作之性質与分量」『文社月刊』、第2巻第7号、1927年、88頁。

¹³ 同上、88頁。

¹⁴ 誠静怡、「中国基督教の性質と状態」、60頁。

¹⁵ 羅炳生「中国教会聯合事業之進歩」『中華基督教會年鑑』、第4号、1917年、199頁。

教会の連合・合同によって教派を超える大きな連合体を設立することである。これらの地域の教会指導者は、教派を越え、相互に協力し合うことで、現地の重大な社会問題を解決したり、社会福祉事業の展開や臨時の突発的な事件に対応する上で大きな助けになるなどの価値を認めた。後に述べる廣東基督教会は長老派や公理会など八つの教会が連合した教会組織の例である。第三に、教会の一部の指導者は、教会の統一を強制的に求めず、一定程度の超教派の連合体を設立し、公の問題における行動一致を図った。例えば、中華基督教協進会及び各省の基督教協進会の存在である。このような形式的な連合・合同により、諸教会はあらゆる重大問題を解決するために比較的まとまった組織として対応でき、未来において各教会が連合するための現実的に実行可能な土台を提供した。第四に、教会の一部の組織（例えば中華基督教教育会、衛生会、日曜学校会など）は、教育、医療などの社会公共事業を通してよりよいキリスト教社会事業を展開し、それにより場所や地域を越えて協力することを強調した。このような協力によって、様々な社会問題に直面しても、スムーズに問題が解決できるようになり、教会による社会事業の発展や社会的な影響を拡大することも可能になった¹⁶。

以上の方式に基づいた、この時期のキリスト教各教派の連合の模範的な事例として挙げられるのが、廣東基督教会である。1924年11月24日、廣東地区の教会連合を促進する組織である「跨差会委員会」(Inter-missions Committee)は、国内事務委員会(Board of Home Missions)を設立し、各宣教協会からの宣教とミッション・スクールへの献金を統括的に管理し、西洋の宣教師と中国教会指導者が同じ組織の下に協力し合い、宣教活動を行うことを提案した。その提案を受け、1925年末に長老会、公理会など8つの教派が連合して、中華基督教会廣東支部の設立を計画した¹⁷。それまで各宣教協会が管理していた宣教師の活動資金は、全国連合である中国教会の管理下に置かれ、宣教師の働き場所は全て廣東支部が直接決めた。廣東地区にいる全ての宣教師は中国教会のメンバーとなり、新しく派遣された宣教師については、廣東支部が直接に国内事務委員会と協議したうえで任命した。宣教活動を展開するために西洋の宣教協会に属する財産は中国教会へ引き渡し、廣東支部が海外の教会からの献金を管理し、直接海外の教会へ連絡を取り、定期的に教会の年度活動報告及び財務報告を海外の教会へ提出した。宣教、教育、医療の分野について、独自の理事会を設立し、高等教育、医療活動を管理した。以上の計画における細かい部分の制定について、各教派の教会による改訂と承認が必要であったが、この計画は全体的な原則として各教会と宣教協会に受け入れられた。こうして各教派の宣教協会は独立性を失い、全ての中国教会に吸収されることとなった¹⁸。1926年6月に開かれた第八回年会にお

¹⁶ 誠静怡、「本色教会之商榷」、6頁。霍德进「中国教會的聯合問題」『文社月刊』、第2巻第9号、1927年、17-21頁。

¹⁷ Eugene E. Barnett, *Cooperative Christian Activities in China in 1925*, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *China Christian Year Book*, 1926, pp. 95-96.

¹⁸ George H. Mcneur, *Chinese Christian Autonomy*, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *The Chinese Recorder*, 1926, pp.17-18.

いて、大多数の宣教協会が教会の管理運営を中国人に手渡すことに同意した¹⁹。

そのほか、1925年8月、汕頭地区の一つ5000名の浸信会団体は宣教師の助けによって、独立中国教会（汕頭浸信会協会 Baptist Convention of the Swatow District）を成立した。汕頭浸信会協会の任命委員会が宣教、医療、教会などの働きを皆管理し、宣教協会に属する財産を汕頭浸信会協会に移行することを宣教師たちと交渉し、宣教師たちの賛同を受けた。そして近い将来特別機構を作り、宣教協会に属する財産を処理し、合法的な方法で中国教会へ移行することを決めた²⁰。

地方の本色化実践の影響を受けながら、全国的な組織の実践的な動向も現れた。最も代表的な実践は中華基督教会の成立である。中華基督教会は20世紀前半において、中国国内の最大超教派の連合・合同教会である。中華基督教会の成立の流れは以下の通りである。義和団の乱以後、長老教会は八つの教派を合同させ「中華基督教長老会」を設立した。中華基督教長老会の目的は単に諸教会の合同のみならず、宣教協会から独立した「中国教会」を作ることも意図されていた、と考えられる²¹。1901年から数回の会議を経て教会の連合・合同について討論した。1918年4月17日に南京で開かれた中国基督教長老会の総会にロンドン会と公理会とが参加し、「中華基督教合同教会」を作る計画が立てられ、1922年4月に上海でこの三つ教派の代表を中心として「中華基督教臨時総会」を設立した。そしてついに、1927年10月、上海で最初の総会が開かれて、全国組織の「中華基督教会」が正式に発足した。全国総会に参加した88名の代表のうち66名が中国人の指導者で、彼らは12の教区と51の分区とを代表していた。中国全土で14の教派が中華基督教会に加盟し、数百の教会堂が含まれ、会員数は12万を超え、全国キリスト者人口の約三分の一を占めた。会議では全会一致で誠静怡が初代会長に選ばれ、参加したあらゆるメンバーが明確に旧教派の思想を放棄し、「教派を超え、一つになる」という原則に基づいて、本色教会運動を推進し、中国教会の総体的な合一を目指した。中華基督教会は、中国人信徒が正統な信仰に根ざして、自ら主体的に動いて結成した中国国内の最大の超教派の連合・合同教会であった。教派的伝統を奨励せず、国の境界によって分かれたらず、ただ中国の社会情勢に適合することと、中国社会の需要に対応することが求められた²²。これは宣教師たちが促進した教派連合・合同運動の最も顕著な成果であり、中国での新たな宣教戦略の成果でもある。

¹⁹ Annual Meeting of the Kwang Tung divisional Council of the Church of Christ in China, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *The Chinese Recorder*, 1926, p. 461.

²⁰ T.C.Bau, Changes in the Chinese Church, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *China Christian Year Book*, 1926, p.135.

²¹ 山本、前掲書、60頁

²² 姚民权・罗伟虹、『中国基督教簡史』、187-188頁。

四、少数民族地域における宣教師たちの実践

少数民族地域においては、少数民族の文化的背景は漢族地域とかなり異なっているため、宣教師たちが教派連合・合同運動を促進するよりは宣教方法の本色化に重点を置いた。中国少数民族地域（特に貴州と雲南）において最も影響を与えたのは、英国循道公会（the United Methodist Church）と中国内地会（China Inland Mission）である。

英国循道公会は主にミャオ族地域へ宣教活動を展開していた。代表的な人物は「ミャオ族の王」や「欧州の大宣教師」と称賛されたポラード（Samuel Pollard 柏格理）であり、彼は本色化の宣教方法を活かし、ミャオ族において大きな宣教成果を挙げた。

清朝乾隆皇帝の時、戦乱と飢饉のためにミャオ族の多くが雲南に逃れてきた。雲南に逃れて来る以前から既にほかの民族（漢民族、イ族など）は肥えている土地を占領していた。ミャオ族は長年にわたって培った素直に受けて忍ぶ民族性のゆえ、交通不便で辺鄙な山岳地域に住むしかなかった。このように厳しい生活環境のもと、ミャオ族は平地農耕の生産方式から山地農耕物の栽培に移り変わり、漢民族やイ族などと比べて、経済発展は非常に遅れた。ミャオ族はほとんどが小作農であり、地元の土司に年貢を納め、生活水準はまわりの他の民族より低かった。そのほかに、ミャオ族は外部の他民族とは接触したり、交流することもほとんどなかった。長い間他民族（特に漢民族の支配階級や周囲のイ族土司・地主）による圧迫があり、基本的な人身の自由と権利さえ保障されていなかった。その問題に鑑みて、ポラードは西洋の宣教師の身分をいかし、現地漢民族の官吏やイ族土司に迫害をやめるように働きかけると同時に、今までの活動拠点昭通からミャオ族居住区石門坎に移し、そこに教会を建設し、直接住民の安全を保護した。漢民族の支配階級や周囲のイ族土司・地主より横領された財産を取り戻し、ミャオ族に返した。すなわち、ポラード自身はイギリス人であり、天津条約（1858年）により、キリスト教布教の自由が認められ、宣教師の保護が義務づけられていることから、地方官吏は彼を守らなければならなかった。ポラードが現地に乗り込んで宣教活動をした方がはるかに、帰依したミャオ族を守りやすかったのである。ミャオ族に宣教の勢力を拡大するため、ポラードは漢民族の服装からミャオ族の民族服装に改め、周りのミャオ族の知識人にミャオ族の言葉を熱心に勉強した。

多くのミャオ族の改宗者が現れた中、ポラードはイ族伝道の挫折の影から解放され、この辺鄙な場所に生活するミャオ族こそ、自分の宣教理想を達成する最もよい対象であると理解した。彼は積極的に英国循道公会本部に宣教レポートを送り、ミャオ族に対する宣教の重要性や宣教効果を訴えながら、更なる支援を求めた。ポラードの熱い思いや英国循道公会本部の多大な理解と金銭支援によって、ポラードは英国教育式の塾「中西学堂」開設した経験を生かし、最初のミャオ族学校を建てた。彼はミャオ族の伝統的な観念を破り、男女共学の学校を設立し、ミャオ族に文字や聖書の知識を普及した。もともとミャオ族は固有の文字を持たず、歴史・神話・伝説・習慣や規則、日常の知識は口頭で伝えられてき

た²³。ポラードはミャオ族に対する宣教活動を深めていくため、他の宣教師、漢民族とミャオ族の知識人と共にミャオ族の文字（ポラード式）を創り、聖書やミャオ族の口伝の歴史・神話・伝説などを文字化した。ポラードはミャオ族の住民に「勉強して字を覚え、教養が身についたら、他民族からばかにされない」という理念を教え、多くのミャオ族の若者に入学するように勧めた。ポラードがミャオ族社会に展開していった学校教育によって、ミャオ族全体の非識字者の数が少なくなり、自身の文化の遅れによる他民族からの差別から抜け出すことができた。

ポラードの宣教によって、社会から見捨てられたようなミャオ族は、キリスト教こそが民族の救いと希望であると理解した。ミャオ族の口伝の神話・伝説には創世神話、始祖神話（十二の卵と人間の誕生）、洪水神話（人間の社会の生成）が含まれているが²⁴、ミャオ族はノアの箱舟など聖書の話をも自分の民族の神話に関連させ、自分の民族は古来のユダヤ民族であることや、キリスト教が先祖の信仰であると認識した。ミャオ族にとって、ポラードは旧約聖書の中のモーセであり、神がポラードを遣わし、彼を通してミャオ族の元来の姿、すなわち秦、漢の豊かで強かった時代が再現されると信じた。

残酷な搾取がもたらした経済基盤の脆弱性に加えて、強烈な鬼神観念に基づく自然崇拜、祖先崇拜などの祭祀活動で神や祖先に献げる生贄として、子牛や羊など家畜を大量に屠殺したり、祭祀活動期間中の大量飲酒の習慣によって、ミャオ族の経済はさらに深刻な影響を受けた。毎年の祭祀活動に莫大な財力をつぎ込み、巨額な借金を背負い、家計を破たんさせる例が後を絶たなかったため、ミャオ族は財産の貯蓄がなされず、生活が一層貧困になっていた。ポラードはキリスト教に入信したミャオ族に対して、伝統的な祭祀活動や、生贄にされた子牛や羊などの家畜の供養を徹底的に禁止した。ポラードの助けによって、ミャオ族の物質的な生活状況は改善された²⁵。

更に、ポラードは以前昭通でイ族への宣教の苦い経験を省みて教訓として、ミャオ族の住民の安全を保護するため、度々周囲のイ族土司との交渉の機会を利用して、イ族土司たちに向けて、積極的に宣教活動を展開した。彼の努力によって、何人かの土司たちがキリスト教に入信し、その土司たちの管轄した地域のイ族住民には集団改宗の現象も現われた²⁶。当時、福音は宣教師がまだ足を踏み入れたことのない地域に、ミャオ族やイ族の手で、野火のように広がりつつあった。それは、ポラードすら、予想もしなかったほどであり、まさに星火燎原の勢いであった。

²³ 鈴木正崇「ミャオ族の神話と現代—貴州省黔东南を中心に」『東アジアにおける宗教文化の再構築』、風響社、2010年、147-148頁。

²⁴ 同上、155-157頁。

²⁵ 徐亦猛「中国の少数民族におけるキリスト教の受容に関する研究—雲南省禄勳県のミャオ族（ミャオ族）を中心に」、『紀要』第46号、明治学院大学キリスト教研究所、2014年、190-191頁参照。

²⁶ 邓章应「伯格理文字的创制与传播」，西南大学文献研究所，2009年，7頁。Grist, ibid, p.147.

ポラードとほぼ同時期にリス（傈僳）族へ宣教活動を展開していたのは、中国内地会所属宣教師 J. フレーザー（James O. Fraser 富能仁）であった。土着化主義の宣教方法はフレーザーのリス族伝道の中心原則であった。フレーザーにとって、現地教会の自立はとても大切であり、西洋伝道会からの経済援助は教会の自立の発展の妨げになると思い、教会が自立すれば、外部環境の変化の影響を受けず、もっと大きな活力を有することができるとした。そのため、フレーザーは現地の信徒の自立への配慮を示した諸策を次々と打ち出した。

フレーザーは、リス族などの、教会の活動の手伝いなどに、報酬を払わないようにした。現地の信者が宣教師に雇われ、それが日常化すれば、宣教師に最も近い信者たちのいる現地教会の自立につながらないと思ったのである。また、教会建設も現地の信徒の献金でおこなうべきだと考えた。1918年3月盈江県で最初のリス族の教会は完全にリス族信徒の献金により、草ぶきの教会を建てることができた。また、印刷されたリス語の聖書は、リス族に無償で配られたのではなく、リス族はそれを手に入れるためには、対価を払わねばならなかった。その土地の教会は、如何に貧しくとも自前の力によって教会建設を進めるべきであるとするのがフレーザーの考え方であった。フレーザーは、現地教会が自立すれば、宣教師は顧問にすぎないと述べた。「宣教師は教会という建物を建てるための足場である」²⁷とも述べたとされる。つまり、建物が完成されれば、足場は取り払われることになる。

フレーザーが心がけていたのは、宣教師が現地の信徒を見守ることができなくなる時が来た時も、現地の人々の力で信仰を守りぬくことができるようにしたいと思ったのである。そのため現地教会の自立は不可欠なのである。自立のためには、現地の信徒の中から、伝道者が生まれなければならない。リス族伝道者の育成が必須であると考え、1928年6名のリス族伝道師を養成した。それぞれの教会の運営も長老たちに委ねられたという。また、毎年、雨期の農閑期において、聖書学校を開き、広く伝道者を養成している。おそらく、この聖書学校および、イースターやクリスマスなどの祝祭には、遠くからリス族を中心とした人々が、催しが開催される教会に多数集まってきたことによって、そこから、普段は山岳のあちこちに離れ離れになって暮らしていた諸部族が顔を合わせ、友情を培うという予期せぬ効果もあったようだ。

中国内地会において、イ（彝）族地域へ本色化宣教活動を成功したのはボーデス（Gladstone Charles Fletcher Porteous 張爾昌）であった。ボーデスは内地会の宣教方針に従い、現地の文化と言葉を非常に重視した。彼らは漢民族の服装からミャオ族の民族服装に改め、周りのミャオ族の知識人にミャオ族の言葉を熱心に勉強した。約10年間の宣教努力の末、武定県撒普山のミャオ族地域にある程度固い宣教基盤を築いた。教会のミャ

²⁷ 福本勝清「雲南における中国内地会の伝道 1900-1952」『明治大学教養論集』、通巻 529 号、2017 年、128 頁。

オ族のキリスト者の勧めによって、ポーデスはイ族を宣教の射程に入れた。1916年ポーデスが武定県撒普山から禄勸県撒老烏のイ族地区に宣教にきた。ポーデスは医療と教育などの宣教活動を通して、イ族地区のキリスト教基盤を固めるために働いた。当時この地区に住むイ族は貧しく、病人も多かったので、ポーデスは、自身の医学知識及びオーストラリアから持ってきた医療器材を活かし、病人の治療を行いながら伝道に努め、イ族の信頼を得た²⁸。彼の病人の中には、大きな影響力をもっていたイ族の宗教指導者ピモと土司もいた。ポーデスの導きによって、ピモと土司はキリスト教へ改宗し、彼らの多くの追従者もキリスト教へ改宗、大きな集団改宗運動の波が禄勸県のイ族地区において広がっていた。このように、ポーデスによって提供された医療活動はイ族への宣教のために大きな役割を果たした。西洋の医学や薬は、現地の潜在的改宗者に、人間のコントロールを超えた病や自然環境によりよく対処する方法を提供すると同時に、イ族の伝統的な宗教実践がキリスト教に比べて効果的でないことを示したと考えられる。

さらにポーデスは積極的にイ族のための教会を建てた。彼は禄勸県の撒老烏でイ族撒老烏総教会を成立し、禄勸県下の各地に合計52の支部教会を建て、イ族の中にキリスト者を増やした。ポーデスはイ族に聖書の知識を普及させるため、英国循道公会宣教師ボラードにおけるミャオ族への宣教方法に倣い、撒老烏総教会をはじめ、支部教会まで小学校を建てた。一時的に小学校の在籍生徒数は500人を数えるに至ったが、経済困難のため1925年には大半が閉校を余儀なくされた²⁹。キリスト教の土着化の観点を絡み合せて、ポーデスは、これからのイ族地域において、イ族のキリスト者が宣教師に代わり自分の同胞に宣教することに備え、神学校を設立する必要があると実感した。ポーデスは、内地会本部及び他教派の宣教団体に宣教レポートを送り、イ族に対する宣教の重要性や宣教効果を訴えながら、経済支援を求めた。ポーデスの熱い思いや様々な教派からの理解と金銭支援によって、1944年撒老烏でイ族をはじめとする六つの民族の連合により西南神学校が設立された。この神学校は少数民族の現地伝道者養成を専門に設立されたものである。

五、結論

中国国内外の激しい情勢の変化に伴って、20世紀初期の中国におけるキリスト教宣教方針は宣教事業から本色化事業へと転換した。その際に、中国教会を自立させ、本色化へ向けて促進させた宣教師たちの役割を高く評価すべきである。もちろん宣教師は本色化運動に対して様々かつ複雑な感情をもっていたが、中国におけるキリスト教の伝道する時間が短いこと、宣教事業の幅が広く、さらに中国教会の経済などの基礎が弱いことなどを

²⁸ Lachlan Strahan *Australia's China: Changing Perceptions from the 1930s to the 1990s*, p. 111.

²⁹ 雲南編集組編、「禄勸県訪問資料」、『中央訪問団第二分団 雲南民族情況汇报 上』、雲南民族出版社、1986年、56-57頁。

考えれば、宣教師たちの中国教会に対する多くの心配や疑いもやむを得ないことである。相当数の宣教師が中国教会の内部の改革を支持し、教会の組織、経済、人材の養成、宗教文化伝統などにおける速やかな革新を促進した。さらに彼らは、宣教事業を中国教会側へ移行し、中国民衆からの孤立や猜疑をかわし、キリスト教をもっと中国化し、時代の流れに適応できるよう願った。

しかし、実際に宣教師たちが中国国内で宣教事業を展開する際、漢民族や地域ごとに本色化の方法は異なっていた。宣教師たちが論じた教会自立の問題の中で最も重要な部分は、中国教会各教派の連合であった。本色化教会は自らの弱い立場を克服するため、西洋の宣教協会が中国に伝えた教派的背景の相違を解消し、教派間の連合・合同と協力を目指した。その結果、全国的な教派連合組織が次々と誕生し、中国における新たな宣教戦略の成果が挙げられた。

一方、少数民族は長期間続く閉鎖的な環境の中で暮らしていたため、文化や生活習慣が非常に遅れていた。彼らの生活を支えていたのは伝統的な原始宗教であった。そのような地域では、宣教師たちは宣教、教育、医療といった地道な方法を用いて活動し、思いも寄らない成果を挙げることができた。

以上の考察を通じて、キリスト教を中国の土壌で成長させるべきという宣教方針は、現代の中国における宣教活動にも大きな意義を持つと言えるだろう。

